

中学生における学力低下と体力低下についての一考察

A study of falling academic standards and decreased physical strength in junior high school students

1K05B042

大堀 嵩久

指導教員

主査 吉永武史先生

副査 友添秀則先生

今日、学力と運動能力の低下が叫ばれている。学力に関しては、ゆとり教育のため授業数が減らされたことや、内容の削減などの結果であると言われている。そのため、今の子どもたちは小さい頃から学校が終われば塾に通わされ、寝る間も惜しんで勉強をしている。しかし、学力の向上に目がいくばかりで、子どもたちに必要な外で遊ぶ時間が減らされている。

なぜ、子どもたちには外で遊ぶ時間が必要なのだろうか。それは外で遊ぶということは頭を使い、知恵をはたらかす機会であるといえる。それとともに、基本的な身体能力や体力を身につけることができる。

そこで、学力を向上させるため塾に通うことや、机に向かって勉強ばかりするよりも運動をしたほうがよいのではないかという思いから本研究のテーマを設定するに至った。

本研究の目的は、動機で述べたように、学力を向上させるためには運動を行うほうがよいということを検討することとする。今まで学力は運動は相反するものとして考えられており、この二つの概念は一つ一つ独立したものとして考えられていた。ところが、自身の中高校生であった時の経験から反対に運動部に所属する生徒のほうが集中力や成績があがるともいわれていた。

しかし、そのような研究はいまだ科学的に実証されていない。そこで、本研究では運動をすることは学力とも疎遠な関係ではないということを、脳科学の分野から検討していくものである。

ところで、何であろうか。また、学力が低下したとは何であろうか。さらにその原因はなんだろうか。

そこにはゆとり教育の問題を含め様々な社会の変化などがからんでいる。また、文部科学省は1964年から全国的に体力・運動能力調査(スポーツテスト)を実施している。ところが、そのようなテストが実施されているにも関わらず、子どもたちの体力は低下しているといわれている。しかし、体力の低下に関しては国民の危機意識も高いものとはいえない。その子どもものの体力の低下は外遊びの減少が原因になっていると考えられる。

今の日本の学力に求められているものは自ら考え、判断することであった。すなわち「生きる力」である。そのためには自然体験活動などを通して身につけるべきだということである。しかし、基礎的な学力をぬきにして、そのような力を求めることは不可能であるとも考えられる。そこで、基礎的な学力である「読み書き計算、空間認知」を身につける際の脳の活動を検討する。

体力向上を行う上で我々は様々な運動を行う。例えば、筋力トレーニングやジョギングをするなど、その方法は多種多様である。しかし、体力を向上させるということは何かしらの運動を行っているといえ、体力を向上させるということは運動を行うことと同義だといえる。そこで、運動を行う際に我々の脳はどのようにはたらくのかを検討していく。

本研究では、学力低下と体力低下の現状とその原因を示した上で、その解決策を考え、それぞれの脳の分野での調査をした。その結果、学問と運動を行う際に共通してはたらいっている部分があることがわかった。したがって、中学生の学力を向上させるためには、学問ばかりをするというよりは適度に運動を行うほうがよいといえる。運動を行

えば、体力も向上する。ということは、体力の向上は学力の向上につながるといえるだろう。しかし、我々はそのことを日常生活でなんとなく感じてい

る。本研究の結果はそれを検討することの一考察として提言し、今後の教育に生かすことを目的として、本研究のまとめとする。